

園番号 809

## 令和元年度 奈良市立大宮保育園 研究実践概要

園長名 八尾谷 和美  
全園児数 179名

### 1. 研究主題

意欲的に活動する乳幼児の育成  
～明日も保育園で遊びたいと思える環境と保育者の役割～

### 2. 研究年度

初年度

### 3. 研究主題設定理由

0歳児から5歳児までの発達の繋がりを大切にしながら保育を行っている。年齢に応じた環境構成に視点において取り組んでいる。環境の工夫や保育者の関わり方によって、「おもしろそう・やってみたい・不思議なぜだろう・できた・うれしい」という気持ちが育まれる。日頃の保育を振り返ると、「子どもの夢中になっている場面はどこか」を考えることが大切だと思った。一人一人の主体性を大切にしながら好奇心や探求心をもって自ら意欲的に遊ぶ子どもを目指し、この主題に設定した。

### 4. 具体的な研究内容

#### ①研究のねらい

- ・「おもしろそう・やりたい・不思議なぜだろう・できた・うれしい」と夢中になって遊びながら、感じたり考えたり、学んだりできるような発達に応じた環境（物的・人的）の在り方を追求する。

#### ②研究の重点

- ・日々の保育の振り返りを行い、保育内容を工夫する。
- ・0歳児～5歳児までの、発達の過程を理解し、それぞれの年齢に応じた環境構成・保育者の援助の在り方を考える。
- ・遊びを通して経験してほしいこと、育ってほしい力を意識し、職員間で理解をする。

#### ③活動の方法

- ・園庭が狭いことを考慮し、園舎・園庭・保育室・リズム室をフルに活用しながら、常に環境の見直しを図り、その都度改善していく。
- ・子どもが夢中になり遊びこむ姿について、いろいろな視点から職員間で意見交流する機会を持つ。（園内公開保育・カンファレンス・遊びの様子について考える）

【0歳児】 「音が鳴ったよ」 10月

(ねらい) ○様々な感触に触れ、体全体を動かして遊ぶ

○保育者との信頼関係ができ、身近なものへの関心が広がる

フリース生地にスポンジや保冷剤、スチロールの緩衝材、鳴き笛など入れたマットを用意した。保育者がマットの上をハイハイしてみせると、「何だろう、おもしろそう」と子どもがマットの側に寄ってきた。一人の乳児が保育者の横に来て、保育者の真似をして、手で触ってみる。子どもが押すと、鳴き笛が「プー」と鳴る。「音が鳴ったね。プープー楽しいね」と声をかけると、にっこり微笑んでいた。

<反省・評価>

子どもの動きが活発になり、よくほうようになってきた為、プレイルームで体を使ったり、様々な感触を楽しんだりできる遊びと空間を用意したが、もっと工夫できたのではと思う。保育者が楽しく一緒に遊ぶことで、子どもの気づきや発見・驚き・期待するなど様々な表情が見られた。そのしぐさや表情を見逃さず、受けとめていくことで、安心して遊ぶ姿が見られた。今後も応答的な温かい関わりを意識していきたい。

【1歳児】 「山 あったー！」 11月

(ねらい) ○砂の感触を楽しむ

○友達の遊びや行動に興味を持ち、やっていることを真似したり、一緒にいることを喜んだりする

園庭に出ると砂場に大きな砂山ができていた。それを見つけた子ども達は、「わあ〜すごい」「大きな」と喜びで、砂山に足を踏み入れてみたり、登って崩れる感触を楽しんでいた。A児は砂山が気に入った様子で、少し離れたところから走ってきて全員で砂山に倒れこみ、「やったー」と言いながら笑顔で何度も繰り返し遊んでいた。二日後、また大きな砂山ができていた。子ども達は、「あった!」「あった!」と山を指さしてジャンプしている。A児は先日の事を思い出し砂山に飛び込んで遊んでいる。保育者を誘って山に登ったり降りたりする。「Bちゃんおいで」と言って友達と手をつないで登り、砂がくずれ足が砂に埋まっていくと顔を見合わせて嬉しそうに足を動かしている。

<反省・評価>

トラックで砂が運ばれ大きな砂山が出来ていたことから、今まで見た事がない砂山に子ども達は興味や関心を示し登る・降りる・飛び込むなど全身を使って砂の感触を味わう事ができた。さらに砂に触れることの経験を積んでほしいという保育者の願いから、砂山を定期的に設定することを計画した。繰り返し遊ぶ経験が、砂の感触や砂の崩れるおもしろさを感じたり、「またやってみたい」と言う気持ちにつながった。興味や関心を持たない子どもには、継続して環境を整え豊かな遊びを用意していくことが課題であり、今後も子ども自らが遊びたくなる環境を考えていきたい。

【2歳児】 「ダンボール大好き」 年間通しての遊び

(ねらい) ○自分なりの見立てやつもり遊びを楽しみながら保育者や友達と関わって遊ぶ。

○見たこと、感じたことを言葉やしぐさで伝えようとする。

想像力や、自分で考えて遊ぶ力を身に付けてほしいという願いがあり、2歳児として比較的 안전한素材で大小形も色々あり、積み上げる、並べる、組み立てる、中に入るなどができるダンボールを取り入れることにした。廊下でダンボールを押して走ったり、ダンボールの中に入ったり隠れたりして遊んでいたが、7月、8月頃には保育者と一緒に積んだり横に並べたりする中で家やお風呂、ベッド、車、バイクなどに見立てて遊び始めた。遊びの経験が積み重なってくると、子ども同士で「○○つく

ろう」と言って同じものを繰り返しつくって遊んだり、テレビや机、お店屋さんごっこなど思い思いの物を自分でつくろうとしたり、保育者につくりたい思いを伝えるようになってきた。12月頃からは、廊下、保育室、園庭と遊びの場を広げた。「ピンポン」「おじゃまします」「いらっしゃいませ」「〇〇ですよ」「はいどうぞ」と保育者や友達と一緒にごっこ遊びのやりとりをしながら楽しみ遊ぶようになってきた。また2月になると、ダンボールを橋に見立てて並べ、絵本で見たお話「3匹のヤギ」ごっこを、遊びの中に取り入れながら遊ぶ姿もあった。

<評価・反省>

保育者主体で始まった遊びが、「自分がしたい、これを作りたい、作ったもので遊びたい」と子どもの姿が変わってきた。さらに保育者と友達と一緒に作り上げていく遊びの展開が見られた。また、2歳児の育ちとして、思ったことを保育者や友達に伝えたり、一緒に楽しさを共有する芽生えを感じることができた。ダイナミックに遊び続ける為に、材料を提供するタイミングを考えたり、保育者の配置場所等、職員間で毎回話し合い、安全に楽しめるようにしていきたい。

【3歳児】 「うごくのだいすき」 11月

(ねらい) ○楽しみながら、体を止める動きで遊ぶ

体幹を育む遊びとして、「うごき」を取り入れている。ピアノの音が変わると、止まるという動作で、なかなか体を止められない子どもが多かったため毎日、少しの時間にストップ遊びを取り入れた。タンバリンを鳴らしている間に走り、「パン」と叩くと止まる遊びを繰り返し楽しんだ。その応用で、止まった時に動物や食べ物などいろいろな物になりきる「なりきり遊び」も取り入れ、子どもの考えを引き出しながら進めた。

<反省・評価>

体を動かすことが、苦手な子ども最初はぐるぐる走ることから入るので、自然に入りやすく皆が参加できていた。思い思いの動物等になりきり、それぞれの個性を他児に具体的に「どこがかっこいい」と保育者が紹介することで、認められ嬉しい気持ちを感じるようになった。今後も「うごき」の活動に加え、普段の遊びの中から子ども達が興味を持つような体幹を育む遊びの工夫をしていきたい。

【4歳児】 「今日もやってみよう」 年間を通しての遊び

(ねらい) ○自分の力を存分に発揮して、遊びや活動に取り組む

ぱんだ・くま組の部屋は横つながりになっており、子どもが自由に行き来できる。春からぱんだ組は静の部屋(じっくり製作に取り組める空間)くま組は動の部屋(体を動かして遊べる空間)として環境をつくってきた。製作遊びでは、家庭から空き箱やストロー、割りばし等を持って来てもらい、それを利用して遊んでいる。始めは、箱と箱をくっつけているだけだったが、だんだんとままごと遊びで使うカバンや食べ物を作り遊びの中で使ったり、ころがしを作るようになり、いろいろな材料から選び、道具の中から使える物をさがし、試している姿が見られるようになった。体を使っての遊びでは、ウレタン押し、ダンボール箱押し、鉄棒、跳び箱、トランポリン、ダンス、縄跳び等で遊んでいる。

<反省・評価>

園庭が狭く、リズム室も年齢で順番を決め利用している。他の時間に室内を利用して体を動かす遊びを取り入れることで、気持ちが発散できたり、子どもが興味を持ち「もっとやりたい」という意欲が高まったりする姿が見られた。また、2つの部屋を使うことにより、選

択肢が増え、自ら遊び意欲的にあそぶ姿が多く見られるようになってきた。保育者の配置や環境構成、支援の仕方について保育者間での話し合いや共通理解が必要である。課題として、共通経験の中で、年齢の育ちから集団で話を聞いたり、考えを伝えたりする事ができる活動を取り入れていきたい。

#### 【5歳児】 「きみもチャンピオン」 10月

(ねらい) ○自分なりの目標をもって挑戦し、失敗しても諦めずに最後までやり遂げようとする。

運動会で縄跳びを使い、全員で走りとび、前とびに取り組んだ。雨の日は、リズム室で縄とびやサーキット遊びをして体を使う遊びを続けてきた。ある日、「誰が一番長く跳べるか」一斉に跳んでみる。「今日のチャンピオンは誰かな」「明日頑張る」「後ろとび頑張ろう」と友達と競い合うことを喜び、意欲的に挑戦する姿が見られた。

事例1：A児は最後まで残るが、チャンピオンになれない日が続いた。できない事に消極的なA児だったが、朝の自由選択活動の時間に自分から縄跳びに挑戦する姿が見えられた。数回目のチャレンジで最後の3人に残り、チャンピオンになった。「やったー」と飛び上がって喜んだA児の表情はとても嬉しそうで自信に満ちていた。また、周りの友達も「〇〇君すごい」とびっくりしたり、自分の事のように喜んだり、「次は、自分も頑張る」と意欲を持つことにつながった。

#### <反省・評価>

友達を意識し競うことから「今度はチャンピオンになりたい」と意欲を持って縄跳びに取り組むことができた。普段は「できない」とすぐあきらめてしまうA児も頑張ることでチャンピオンになり自信をつけ、縄跳びだけでなくマラソンにも意欲を持っている。一人一人がその過程の中で自信をつけ次への意欲につながるように、目標を持ち挑戦できる機会を多くつくっていきたい。

### 5. 研究の成果

年齢に応じた環境構成を意識しながら行う事で、様々な経験をする事ができ、子どもが「やりたい」と夢中に遊んだり、「どうしよう」と考えたり、「やってみる」と挑戦する等の姿につながった。また、一人一人の思いや心に寄り添った援助をする事で、子どもが生き生きと活動し、思いや考えをいろいろな方法で表現しようとする姿が見られ、子どもの内面の育ちにとって大事であると感じた。

### 6. 今後の課題

子どもが夢中になって遊びこむためには、保育者は子どもが何に興味関心を持ち、何に心を動かされているのか、何を学ぼうとしているか等、子どもの姿から常に見取ることが大切だと実感した。そして、見取った内容を保育者間で話し合い共有することが必要である。0歳児～5歳児の発達過程の理解ができているか職員間で確認しながら環境構成の工夫や、保育者の援助の在り方を考えていきたい。